

## 社会機構と教会機構

竹 中 正 夫

日本の教会がこの国の土壌において力強い働きを展開してゆくためには、並々ならぬ苦勞があり、とりわけ、現在のように社会の変化のはげしい時代にあつて、一体教会はどのような体制をもつて与えられた課題を果すべきかという教会の組織の問題が重要になってきている。

日本基督教団では、1960年いらい10年間の方針として、「体質の改善」「伝道圏伝道」という二つの柱をたてて、新しい教会づくりを推進している<sup>1)</sup>。また、関西の労働者伝道や職域伝道にたずさわってきた前線グループフロンティアのなかから、新しい教会の機構についての要請がのべられている<sup>2)</sup>。さらに、日本の大学においてキリスト者として証と奉仕の働きをしている人々の中から新しい教会の機構を探求する声があがっている<sup>3)</sup>。このほかに、十分な知的表現形態はとっていないが一般信徒のなかに、現代の教会の機構についての素朴な見解が可成り広汎に存在することも否定し得ない事実である。

これらの現実からの要請にも拘らず、教会の機構改革についての動きはきわめて徐々なるもので、周辺のアクセサリーのとりかえに終始して、根本的な骨組みの変革に及んでいない状況にある。たとえば、教団がとなえる「体質の改善」や「伝道圏伝道」にしても、どれだけ地方の各個教会に滲透してうけとめられ、それによって教会の組織体制までが具体的に変わってきているかという点、いくつかの例外を除いては旧態依然とした形態が静かに守られており、それを固守することが教会の使命であるかのような悲壮なまでに堅固な姿勢がみられる<sup>4)</sup>。

教会の機構を論ずる場合、いくつかの困難な問題があり、それが今日の教会の革新論の展開の障壁となっている。それらの壁は、現実の教会の問題であり、一般化しにくい、その多くは共通した理論的な検討を要する課題である。教会機構を変革しようとする努力を妨げる

いくつかのカベをあげてみるとつぎのような五つの点があげられると思う。

## I

第1に指摘されることは、教会の組織とか体制とかいうことは、聖なる領域に属するもので、社会学者たちの分析にまかせるべきでないという主張がある。教会は、聖霊の働く信仰の宮であり、社会学は理性をもって対象を分析するもので、両者には相いれない要素があることを主張するものである。宗教集団の中には、聖なるものを自己の中に保持しているという意識が存し、社会科学的なメスをもって宗教集団を分析することはタブーのように考えられないまでも、あまり積極的に歓迎されない場合が多い<sup>5)</sup>。

宗教的集団は、たしかに超越的な宗教的真理との交流を中心として立っており、理性を尺度とする社会科学的分析のみでは割り切れないものがある。しかし、宗教的集団自体社会現象の中にあるばかりでなく、社会的な機構をもち、組織として、社会的な営みをなしていることは、否定し得ない事実である。われわれの関心は、特定の宗教的集団が果してその集団が内側で確認している真理を表明するものにふさわしい形態をこの時代にとっているかということである。この点において、社会機構の変革のなされている今日にあたって宗教的集団の社会学的検討は重要な課題となってきた。

## II

宗教的集団の機構の変革を社会との関係において検討するとき第2に指摘されることは宗教は永遠に変らないものであって、社会機構がどんなに変わっても教会や寺院は変らないという意見である。この立場には、宗教的集団の不変性を説く正統な主張がこめられている。たしかに、天地がどんなに変化しても、宗教的真理は変らないということは聖書にも記されている。

「人はみな草のごとく　その栄華はみな草の花に似ている。  
草は枯れ、　花は散る。　しかし主の言葉は、とこしえに残る。」<sup>6)</sup>

とくにかれわれが十分に警戒しなければならないことは、社会的変革をとくに急なあまり、宗教的集団はそれに追従して変るべきだという安易な迎合論におちいることである。大多数のドイツの教会はナチスの体制下にあつてそれに順応し、日本の教会が、戦時下の要請に従つて、国家主義に協調したことは、今日再検討されている<sup>7)</sup>。この場合とくにキリスト者が少数であるとき多数者である社会的な趨勢に従つてゆくという危険性のあることを十分に警戒しなければならない。社会的激変のなかに教会の使命を真剣に追求しているインドネシアの一人のキリスト者はこのように記している。

『今日アジアにおけるキリスト者は、社会変革がキリスト者の自らの生活に何を意味しているかを探索している。自分自身の旅路にあつて、社会の変革をどう受けとめたらよいかをたずね求めている。社会の変革にあつたと自分の宗教的な殻の中に閉じこもってしまうという誘惑がある。ある場合は、世界の変革があまりにも激しいので、教会にその変革からの逃避場を見出そうして、つぎのように言う人もある。「世界は変わつても、教会だけは変らない」と。しかし、そうした態度は間違っているのではなからうか。キリストこそ不変不動な方である。われわれすべては、キリストにあつていつも新しく造りかえられているものである。このことは混同されてはならない。』<sup>8)</sup>

たしかにイエス・キリストは昨日も今日も変らない。しかしそのことは教会が旧態依然であつてよいというのではない。むしろ、変らざる真理が流動する時代に生かされるために、教会はふさわしい態勢をとるべきである。教会はよく戦闘の教会といわれるが、その戦いがおこなわれるのはこの世界であり、戦闘の目的は変らないが、その態勢はそれぞれの時代に応じて流動的なものである。メッセージの内容は変らないが、それをもる器はそれぞれの状況に応じて、多様性をもつて来たことは教会の歴史を丹念に省みるなら明らかなことである。

### III

第3に、教会の機構について指摘されることは、教会も現実的には社会的集団の一つであり、社会的集団のもつ法則によって可成りの程

度拘束されているということである。たとえば、一つの集団が形成され、或る一定の形態をととのえたと制度化 (institutionalization) の傾向をもち、出来上った制度を維持することに懸命となる。本来は医療を通して社会に奉仕することを目的として、小さな診療所をつくったところ、それが、病院となり、大きな機構や制度へと発展するにしたがって、こんどは、その制度や組織の維持が主たる目的となつて了うことがある。大学においても、大学本来の目的がともすればおろそかにされ、その制度の維持と経営が中心的な関心となる傾向がある。これを制度の自己保存性 (self-perpetuation of institution) とよぶことが出来る<sup>9)</sup>。

教会も社会的制度の一つとして、自己の制度的形態の維持を目的とする傾向がある。制度的教会はキリストのからだであつて、単なる精神的な存在ではない。それは、からだとして見た共同体のかたちをとつて一定の時代と社会に存在する。しかし、教会はともすれば、一つの形態の維持に固執し、その時代にあつて、ふさわしい (relevant) 形態を新しく見出すという観点に立つことが必ずしも常におこらない。

たとえば、プロテスタント教会は、カトリック教会から制度的にも袂をわかつて形成されて来た関係上、教会の制度上においても刷新的な立場をとっているかというとも必ずしもそうではない。むしろ、自分が受け継いだ制度を金科玉条のように固守していることが多い。

トレルチは教会の制度的分析をし、その型態を、「教会的類型」「分派的類型」「神秘主義的類型」の三つに分けているが<sup>10)</sup>、その後の宗教社会学の研究において、「分派」はやがて「教会」となり、制度的な形態をととのへ、その制度を保持する傾向が指摘されている<sup>11)</sup>。たとえば、メソジスト運動は、最初は英国教会の内側に生れ信仰復興の運動であつたが、ウェスレーの死後、分派としての形をととのえて独立し、その後制度化された教会的形態をとり現在に至っている<sup>12)</sup>。

さらに教会制度は社会学的集団の一つとして、社会の影響を多分に受けており、一つの教会組織の定着化の歴史的過程を実証するなら、そこに当時の社会的な影響が多く含まれていることに気がつくことと思う。たとえば、中世における教会制度の発達とローマ法の思想との

間には密接な関係があったし、プロテスタントの改革がなされてゆく過程においてそれぞれの国の社会的、経済的とりわけ政治的な要因が教会制度の刷新にきわめて顕著な影響を及ぼしていることを見逃すことは出来ない。さらに、米国における諸種の教派 (denominations) の成立の事情においても多分に社会的な要因の影響を受けていることは否定し得ない事実である<sup>13)</sup>。

現在エキュメニカル運動においては、教会の一致を追求しているが、社会的な要素が教会の制度の中にすでに導入されており、それによって教会の分裂が行われていることが指摘されている。1952年スウェーデンのルンドで開かれた第3回信仰職制世界会議は、その重要性をみとめ、「教会の不一致における社会的文化的要素」を研究する部門を設けた<sup>14)</sup>。それいらい WCC の信仰職制委員会は、教会の機構制度についての研究委員会を設けて研究をすすめることになり、つぎの諸点について研究をすすめるようになった<sup>15)</sup>。

- 1 教会の機構を社会学的に又、神学的に自己検討する。
- 2 教会が互いに話しあい、関係をもったことによって、教会機構に積極的に消極的にどの様な影響を与えるか。
- 3 教会相互関係を表現する形態として世界教会協議会を一つの制度、組織の立場から検討する<sup>16)</sup>。

これらの研究は実際には、主として第1の教会制度の社会学的研究についてなされ、1955年から1963年にわたって続けられ、63年に開かれたモンリオールにおける第4回信仰職制世界会議に報告がなされている<sup>17)</sup>。

たしかに、教会制度の社会学的研究には、十分に警戒すべき点がある。それは、分析をする社会学者が教会についての内的な理解をもち、神学的な教会理解をなす人々と共同して分析にあたるということである。

教会の制度についての社会学的研究をなすことは、教会は全く社会学的要素によって規定されているという社会決定説を支持するものではない。教会がそれ自体、独自の超越性をもって社会に影響を及ぼしてきたことは歴史的な事実である。と同時に教会が、社会的制度とし

て、それが存在する社会から影響を受けてきたことも否み得ない事実である。前者のみを主張するなら、観念的な精神主義となり、後者のみを主張するなら教条的客観主義となってしまう。

真理はむしろ、社会的な要素と宗教的な要素の相互関係依存を認めるところにあると思う。今日、宗教社会学者たちの多くは、社会が宗教集団に及ぼす影響を厳密に認めながら、宗教的集団の内的な価値が、社会に対して影響を与えている事実を確認し、両者の相互依存性を指摘している<sup>18)</sup>。

この点からいうなら、「社会的機構がどんなに変わっても教会の機構は変わらない」という人は、遁世的超俗主義におちいることになろうし、「教会の機構は社会機構にしたがってなされるべきだ」という人は、環境支配説の虜となっているといえる。われわれの関心は、社会の変革を厳密に分析しながら、その状況において、教会がその本来の使命を果すにふさわしい制度的形態をとることにあるのである。

#### IV

さて、社会の機構の変革について論ずるとき、われわれが考慮しなければならぬことは、日本の社会における日本の教会の現実的な把握に立ってなされねばならない。

教会の革新、とくにその機構の革新について考えようとするとき、それらの論議は西欧の教会で考えられていることで日本の教会にはあてはまらないとする批判がある。たしかに、キリスト教が長い伝統をもち、形式的にせよ多数者を占めているヨーロッパやアメリカにおける教会機構の革新の青写真をそのまま日本にもってこることには多くの問題がある。

しかし、そのことは、日本の教会は現状の機構のままでよいということにならない。今日エキュメニカル運動でもっとも強調されていることはジュネーブやヴァチカンでいかなる会議をしてどんな声明をなしたかということではなく、自分の住んでいる場所で、キリスト者がいかに具体的に一致して証しと奉仕にあたるかという課題である<sup>19)</sup>。

現在の日本の教会の形態には、意識的・無意識的に西欧の教会から

来た形態が導入されている。それらは、西欧の教会においては、妥当性をもち、その歴史的な状況のなかから生れてきたものであったかも知れない。しかしその西欧の教会でさえも現在の社会的状況の変化にともなって機構の改革が危急の課題となっている。まして、西欧におけるキリスト教会の状況と全く異なるアジアの状況では、西欧の教会の機構がそのままあてはまることはないのであり、現在の社会的状況のなかで、それにふさわしい機構態勢を日本の教会は現場の体験の中から積み重ねて形成してゆく必要があると思う。われわれは、ともすれば、一時代前の西欧的な器を大切にもって、それを充実することに懸命となり、器そのものの形をあらためるといふことは考えてはならないのだろうか。この点から無教会主義は西欧のキリスト教の形態に対する日本的プロテストの代表的な例として意義がある。しかし、残念なことに、無教会は、かつての西欧的制度に対する批判は強かったが自己の教会理解に基づいて、それを日本の国で表現するにふさわしい教会の制度組織の形態を形成するという配慮に乏しい様に思う。

一例をとるなら、西欧の教会の分裂の過程には、教義的な理由によるものもあったが、少からずの教会が、文化的、政治的、人種的な要素から教会がいくつにも分れていった。そして外国伝道は、コミティ(Comity)という地域協定を教派間でした場合もあるが、多くは、自分の属する教派の教会を文化的、政治的、経済的に全然ちがった社会に形成しようとした。その結果、アジアやアフリカにおける若い教会の多くは、至って不完全な形で一時代前の西欧の教会の分裂した教派的教会機構を多分に残存させた教会なのである。

今日、アジアの教会が、そのアジア的な状況の中で、福音を再把握し、アジア人の意識をもって、信仰の告白をしようとしていることは意義深いことである<sup>20)</sup>。昨年11月に香港で開かれたEACC(東アジアキリスト教協議会)の協議会では、主として、アジアの諸教会がアジアの状況のなかで信仰の告白をすることを論じているが、そのなかで、教会の機構の変革についてつぎのように語っている。

「わたしたちは、神の言を新しくきき、聖なる生活において、礼拝において、そして教会の聖務と一致の働きにおいて、新しくされる必

要性を語ってきた。しかし、それらが実現されるためには、どうしても、わたしたちの伝統的な教会の機構が新しくされる必要がある。今日、教会のさまざまな働きを新たにしようとする力が働いているし、教会は、キリスト者がこの世で十分な働きをするために、新しい形態をとり、新しい機構を産み出す必要がある。……とくに、それぞれの職域に属するキリスト者が、告白する信仰を強め、共同の使命を果すために教派を越えて互に訓練し合う新しい態勢を必要としている」<sup>21)</sup>。

とりわけわたしは、これからのアジアの教会が取りあげるべき課題として、礼拝と信徒訓練の課題を真剣に考えるとき、現在の教会の機構はあまりにも各個教会にばらばらであり、一時代前の社会機構と結びついており、これからの社会を指向する形態と言えないのではないかという思いを禁じ得ないのである。

## V

最後に教会の革新は未来にむかった眼ざしをもってなされねばならないことを考えてみたい。このことは、教会の革新を神学的な基盤からとらえるときに明らかになってくる。

教会の機構は単に社会の機構のうつり変りに追従するものでなく、独自の教会の使信と使命からたえず人類の未来を指さしながら形成されてゆくものである。勿論教会はその働きを通して過去を回想し、イエス・キリストの出来事を想起する。しかし、教会は単に過去を記念する集団ではない。

「手をすきにかけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくないものである。」(ルカによる福音書9ノ62)というイエスのことばは、イエスに従おうとする者すべてに与えられているよびかけである。教会は、イエス・キリストの十字架と復活の出来事を過去の歴史のなかに想起することによって、未来の歴史に眼ざしをむけて歩む旅人のつどいである。イエス・キリストの出来事において、創造から現在に至るまでの歴史における神の約束の確かさを確信するが故に、未来における神の勝利と共在(インマヌエル)を信望して、明日への旅路をこの世界のなかで、世界の人々と共に歩むのである。



教会は過去を記念するうしろ向きの博物館でないし、現状維持にあげ暮れする企業組織でもない。教会は人類の未来を信仰の観点から指さす、旅人の共同体である。

この点について、わたしはつぎの三つの点から教会の性格を検討してみたいと思う。

(1) 教会が未来を指向する共同体であるということは、教会の終末論的性格を意味している。このことは、教会が他界的、彼岸的精神主義をときこの世のことからは、結果的には逃避してうことを意味するのではない。また、なにか超自然的な突発的なこの世の終末に備えて悔い改めることを意味するものでもない。

聖餐の典礼には、終末論的な希望のあることがいわれている。それは単に逃避的に未来をみるのではなく、悔改めによって未来の救いをねがうというのではなく、イエス・キリストの最後の晩餐というかつて起きた具体的な出来事を回想することによって、やがて来る神の国の祝宴を待望するのである。現在、教会が守る聖餐式はやがて来るべき神の国のよろこびの前徴 (foretaste) である。聖餐式が過去の追想だけに終るなら、お通夜となってうが約束された未来を待望することによって祝宴となる。

教会が「はじめ」であり、「おわり」であるものの共在性を確信し、未来における神の祝福の確さを確信するとき、人類の歴史の流れにおいて、教会は、後向きの存在とならず、前向きの存在となる。教会は、たとえ社会の集団がどちらを向こうとも、それ自身の基盤において、未来を待望する共同体なのである。

(2) 教会は人間の幾多の共同体のなかにあつて独自の共同体として未来を指向する。勿論この世界の共同体のもつ人間的文化的要素を教会はそれ自体の内側に内含している。しかしそれは同時に聖霊の働きによって今日まで保持されてきた共同体である。人間の共同体のなかに働いている諸法則や諸制約がそこにある。しかし、人間の働きを越えた可能性に対して開かれている共同体である。そして教会は他のすべての人間の歴史的共同体のなかにも人間の自律的な素材を通して神の業が働いていることをうけいれている共同体である。

アブラハム以来、神は人間の世俗的、歴史的共同体の相互依存関係において、インマヌエルの神であることを実証された。それが、イスラエルの歴史であり、新しいイスラエルとしての教会の歴史であった。

この世における組織や制度が、人間によってつくられ、人間の疎外を造り出し、さらにそれに対抗して人間を保つため組織制度が生まれ、人間を複雑な組織制度の重圧の下においているとき<sup>22)</sup>、教会は宗教的集団として他の社会的集団に対していかなる意味をもつものであろうか。神がこの世のすべての組織や制度の上においても主であり、関係をもつ存在 (being-in-relation) として存在するならば教会はどのような神学的意味をその共同体の在り方にもつものであろうか。

教会は、時間的なものと永遠的なもの、人間的なものとの神学的なものが出会い、新しい結合へと変革される共同体である。そして、そのことを通して、教会は、すべての共同体の本来の在り方を指し示す根源的な共同体 (the paradigmatic institution)<sup>23)</sup> である。その存在そのものを通して、完全ではないが象徴的に、真の共同体の性格で示す存在が教会である。

たとえば、教会は、人間の男女の関係の真の在り方を、キリストの花嫁という姿であらわし、キリストと教会との関係によって、夫婦の関係が象徴的に例示されている<sup>24)</sup>。教会は来るべき神の国の譬を語るのみでなく、土の器でありながらも、目に見えた共同の生を通してそれ自体が神の譬となるものである。その点から言うなら、教会は、比喩的制度 (The parabolic institution) とも言うことが出来る。

(3) 教会が来るべき神の国の前ぶれ (foretaste) として、そしてそれを象徴的に例示する共同体であるというなら、第3にわれわれは、現代の日本の社会の組織制度的発展のなかにあつて、いかなるイメージを教会は再確認すべきかということが重要な課題となる。

イエール大学の新約学者ポール・マイニャ教授は、新約聖書において、教会のイメージをあらわしたことを分析し、約80種類をあげている<sup>25)</sup>。このことは、キリスト者は一つ丈の教会理解に立たずに、それぞれの社会的状況と文化的背景に応じて、いろいろちがった教会のイメージを把握し、表現して来たことを意味している。

教会が、この世の組織の根源的な組織であるというとき、新約聖書において、パウロがしばしば用いている「からだ」のイメージは深い示唆をもっている。それは、精神と肉体とを統一的にとらえたものであり、観念論と唯物論を止場した立場であるばかりでなく、現代の組織の相互依存関係においても、有機的な指標を与えるイメージであると思う<sup>26)</sup>。新約聖書は教会の在り方を示すとき、キリストの「からだ」というイメージを用いているが<sup>27)</sup>、それは、個人主義的なイメージではなく、連帯的な共同体のイメージであり、之は、来るべき神の国の姿をその共同体の生活を通して指標する例示的組織の姿とみなすことが出来るのではないかと思う。

この様に考えるとき、教会は、神の国を来らせるための単なる手段ではない。教会はよりよき社会のための機能的集団ではない。従来社会的関心をもった人々によってもたれた教会観の中には、そうした理解が多かったことは否み得ない事実である。教会は終末を待望し、絶えざる悔い改めと革新の中に、来るべき神の国の前徴として、その共同体の在り方自体が、他の共同体の相互関係を根源的に例示するものである。かくて、教会は単なる伝道的手段としての宗教集団ではなく、神の御霊をうけることによって、新たににつくりかえられる神秘的なキリストのからだとして、この世的な、人間的な破れと限定の中に、人間の連帯性を有機的に象徴する共同体とせられているのである。

#### 註

- 1) 日本基督教団伝道委員会・宣教研修所「新しい教会づくり」,1964
- 2) 平田 哲「家の教会」キリスト新聞、竹中正夫編「教会と労働者」,1960  
日本基督教団戦域伝道委員会。日本基督教団伝道委員会・宣教研究所共著「新しい教会づくり」。
- 3) 「学生キリスト者」3,7,9 「大学キリスト者」12,15等 参照。
- 4) 高倉 徹「伝道十か年計画前半の評価と展望」教団新報1967年10月2日3514号。
- 5) もっとも極端な例は「本道」などの一部の新興宗教にみられる。キリスト教会は一般的には社会学的な分析を歓迎するし協力的である。しかし、その成果にてらして体制を再検討をするという程ウエイトにおいて、それらの分析を重視しないことが多い。
- 6) ペテロの第一の手紙1の24。
- 7) この観点から日本基督教団において戦争中の基督者の責任についての告

- 白が検討され論議されていることは注目すべきことである。
- 8) Witnesses Together, Report of Inaugural Assembly of East Asia Christian Conference, 1959, p. 38.
  - 9) 制度が一度確立されると、保守的傾向をとることは Kenneth Boulding, *Organization Revolution, The Happers*, 1953, ボールディングは米国に約2000の郡(County)があるがその中で廃止になったものは僅かに三つで、あとは殆んど実際の用をなさなくなった現在でも、存続していることをあげている。
  - 10) Ernst Troeltsch, *Die Soziallehren der christlichen Kirchen und Gruppen*, 1911, pp. 362ff.
  - 11) Liston Pope, *Millhands and Preachers*, 1942, pp. 122-124.
  - 12) メソジスト教会の社会学的検討については、Nolan B. Harmon, *The Organization of the Methodist Church*, 1953.
  - 13) Richard Niebuhr, *The Soical Sources of Denominationalism*, 1929.
  - 14) ルンドのこの部門の研究をまとめたものが、“Soical and Cultural Factors in Church Divisions”, London, SCM Press, 1952.
  15. 6) 正式には、Study Commission on Institutionalism, Minutes of The Working Committee of the Commission on Faith and Order, Davos, Switzerland, 1955, p. 11.
  - 17) Nils Ehrenstrom and Walter G. Muelder, (ed.) *Institutionalism and Church Unity*, Association Press, 1953. この中に教団の成立史について石原謙先生の論文がある。
  - 18) Joachim Wach, *Sociology of Religion*, 1944, pp. 12-13.
  - 19) *All In Each Place, The New Delhi Report*, 1962, p. 118.
  - 20) *Confessing the Faith in Asia Today, Statement Issued by the Consultation convened by EACC and held in Hongkong, October 26~November 3, 1966.*
  - 21) 同上書 p. 112.
  - 22) 組織における人間の疎外状況の分析については、H. Freyer, *Theorie des Gegenwärtigen Zeitalters*, 1955, A. Gehlen, *Urmensch und Spätkultur*, 1956 を参照。
  - 23) W. D. Marsch, “Kirche als Institution in der Gesellschaft,” *Zeitschrift für Evangelische Ethik*, 4 (1960), pp. 73, とくに p. 87.
  - 24) エベソ人への手紙第5章22~33.
  - 25) Paul Minear, *The Images of the Church in New Testament*, 1961.
  - 26) J.A.T. Robinson, *The Body*, 1952, Eduard Schweizer, *The Church as the Body of Christ*, 1965.
  - 27) エベソ人への手紙第4章, コリント人への第1の手紙12章, ロマ人への手紙12章。